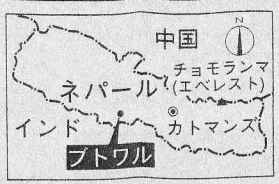
阪神大震災の直後、被災地にアジア・アフリカからも救援の手が差し伸べられた。その「お返し」として毎日新聞、毎日新聞社会事業団はAMDA（アジア医師連絡協議会、本部・岡山市）とタイアップ。昨年の「飢餓・貧困・難民救済キャンペーン」で、ネパール・プトワル市に子ども病院建設を呼びかけた。読者の反響は大きく、今春にも着工できる見通しになった。この病院の今後の運営を担うAMDA代表の菅波茂さんと、病院の設計を申し出てくれた建築家の安藤忠雄さんのお人柄「国際貢献とボランティアのこころ」を語ってもらった。（司会は朝野富三・大阪本社社会部長）



『ありがとう』の交流を

行動する若者が日本を救う

安藤

国際貢献のこころを語る

安藤　忠雄氏（建築家）
菅波　茂氏（AMDA代表）

安藤忠雄（あんどう・ただお）さん　1941年、大阪生まれ。独学で建築を学び、79年「住吉の長屋」で日本建築学会賞。93年に日本芸術院賞、95年に建築界のノーベル賞といわれるプリツカー賞を受賞。大阪市で安藤忠雄建築研究所を主宰。

菅波茂（すがなみ・しげる）さん　1946年、広島県・神辺町生まれ。84年にAMDAを設立。95年、国際平和に貢献する研究者らに贈られる国連のプトロス・ガリ賞を日本人では初めて受賞。岡山大医学部卒。岡山市で内科開業。

——なぜ、ネパールに子ども病院が必要なのでしょうか。

菅波　ネパールにはブータン難民が流入し、1992年から医療救援のためにAMDAジャパンとAMDAネパールの医師団が現地に入り、難民に加え、地域のネパール人も困っていたことが分かりました。その両者を視野に入れた医療センターを発足させ、高度な医療を展開し、看護婦などを養成する学校も開き、実績を積んでいました。さらに、震災の医療救援に駆けつけてくれたネパールから留学中の3人の医師が帰国後、保健医療で死亡率の高い母国の子どものために頑張りたいという意向があります。

ネパール・プトワル市に建設が決まった安藤忠雄さん設計の病院の模型

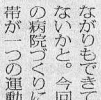
援助される側の気持ち尊重

菅波

——安藤さんにとって、ネパールの病院への期待は。

安藤　日本人のアジアとの関係は、直接的な経済支援は結構あるのに、その国の人々との心の対話が重要だという共通点があると思います。そして、こうしたネットワークの中で、アジアとの話し合いや、つながりもできていくのではないかと。今回のネパールの病院づくりにしても、連帯が一つの運動になっていくために、ぼくは設計の立場でつながっていけたらと考えました。

——阪神大震災以降、国際貢献のあり方は大きく変わってきたと言われています。



菅波　国際社会では、「理由のない親切」は警戒感や不安を持たれます。例えば日本政府がサハリン地震の時に協力を申し出たら、ロシア政府から断られた。その受け入れ条件として、北方4島を返せといわれるのではないかと。

阪神大震災の後、モンゴルから毛布が、フィリピンのラモス大統領から1カ月分の給料が、次々と送られてきた。こうした国々からの援助は、「困った時はお互いさま」という相互扶助だったわけです。

合言葉は震災のお返し

安藤　AMDAの運動も、人々が手を結んでいこうという心の対話が重要だという共通点があると思います。そして、こうしたネットワークの中で、アジアとの話し合いや、つながりもできていくのではないかと。今回のネパールの病院づくりにしても、連帯が一つの運動になっていくために、ぼくは設計の立場でつながっていけたらと考えました。

——阪神大震災以降、国際貢献のあり方は大きく変わってきたと言われています。

菅波　国際社会では、「理由のない親切」は警戒感や不安を持たれます。例えば日本政府がサハリン地震の時に協力を申し出たら、ロシア政府から断られた。その受け入れ条件として、北方4島を返せといわれるのではないかと。

阪神大震災の後、モンゴルから毛布が、フィリピンのラモス大統領から1カ月分の給料が、次々と送られてきた。こうした国々からの援助は、「困った時はお互いさま」という相互扶助だったわけです。

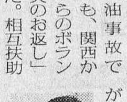
——震災がボランティア元年と言われ、若者も被災地に駆けつけました。日本海の重油流出でもそうです。

安藤　日本人、日本の国というのはいま、難しいところに来てますよね。それを、中高年層よりも若者の方が敏感に感じているんだと思います。今回の重油事故でも若者が素早く行動し、一番行動が遅かったのは政府だったというのは象徴的でした。経済大国・ニッポンを享受した人たちの緊張感のなさが、阪神大震災や重油事故の対応の仕方にも出ていると思うんです。だからこそ、若い人たちがああいう行動ができたのは救いでした。この緊張感を次の時代につなげてほしい。

相互扶助は与える喜び

菅波　重油事故でも、関西からのボランティアは「震災のお返し」が合言葉だった。相互扶助が社会通念として定着したという気がします。ボランティアは若い人が多かった。詰め込み教育、偏差値教育の中で「もらう喜び」というのは知っていたが、震災以降、「与える喜び」を知ったと思います。それが大きいのではないでしょうか。

——この時代、「こころ」が問われています。



安藤　テレビをつけると、女性がマラソンで元気よく走っている。でも、それを見て日本が元気かというと、疑問を感じる。

ネパールに子ども病院を

「違いは財産」の時代 菅波
安藤 均質社会から多様へ

——お互いに、痛みが分かり合える、つまり、異質なものをどれだけ受け入れていけるかが、大切なことなんでしょう。

菅波 18世紀以降をみると、同質性の国が勝ったんです。中国もインドも、植民地になった国は、多様性に富んでいる。近代化の富国強兵政策は、同質性の教育ですぐこれに成功した日本は植民地を免れた。「違いはお荷物」だったわけです。でも、今は、「違いは財産」の時代になろうとしています。この教育を行った国が21世紀は残っていく。

安藤 日本の教育は異質なものを受け入れず、徹底して均質化されたことで、経済社会としては成功したが、国際化、情報化社会では通用しなくなりました。思い切って多様な社会に変えていかなければならないでしょう。

——その違いを理解したうえで、どのように外国と付き合うべきでしょうか。

菅波 人間の付き合い方には、フレンドシップ、スポンサーシップ、パートナーシップの3種類があるように思います。「ありがとう」という言葉がどちらに向いているのかで、分けられます。フレンドシップには、「ありがとう」は不要。スポンサーシップは一方向だけ。そして、パートナーシップはお互いに関係です。欧米のNGOは、スポンサーシップが多い。AMDAが目指すのはパートナーシップです。これからできるネパールの病院に国際ボランティア支援センターなどを併設し、日本からも多くの人に来て勉強してもらう。そうすると、日本からネパールに対し「ありがとう」が言えるんです。

安藤 スポンサーシップは日本がODA（政府開発援助）といった形でやってきました。支援を「する側」「される側」で心の交流がないので両方がちょっとつらい思いをする。

菅波 「ありがとう」という言葉がひんぱんに出れば、本当の交流になるんでしょうね。

子ども病院を

AMDAがサハリンに緊急救援で入った時「震災の支援のお返しに来た」と言うと「分かった」と受け入れてくれた。昨年の中国・雲南大震災もそうでした。

援助する場合、考えなければならないこととして、①だれでも他人の役に立ちたい②その心に国境はない③援助を受ける側にもプライドがある——という3原則がある——という3原則である。阪神大震災で、日本は初めて援助される立場が理解できたと思います。世界に何かをしようとした時、この原則を忘れてはならないでしょう。

ネパールの子どもたちに目に見える援助を実施するため、今回のキャンペーンは現地で進められている子ども病院建設に協力しています。救援金は、左記へ郵便振替か現金書留で送金いただくか、直接ご持参ください。

〒530—51
大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係
（郵便振替・00970—9—12891）

菅波氏 国際貢献のこころを語る 安藤忠雄氏